

## 平成7・8年度 日本放射光学会の基本方針

日本放射光学会会長  
富家 和雄



日本放射光学会の会則が変更され、今期の会長の任期は変則ながら、1995年4月から、1996年12月までです。以後は2年任期となり、会計年度も1月1日から始まります。今期の会長を私が引き受けさせて戴きます。御協力のほど、宜しくお願い申します。

1985年の初夏の頃、日本放射光学会を設立しようとの声が高まり、多くの、特に若い方達がそれに向けて奔走されました。設立趣意書も7稿目で決着したと聞いています。様々な物質科学の分野の人達が集まって、放射光という共通した道具を使って、それぞれに自分の研究を進めるのですから、分野は違っても、自ずから他者との連帯意識が生ずる結果として本学会が設立したと思います。世界でも初めての試みでした。以後10年、本学会は順調に発展してまいりました。放射光光源も第一世代の東大核研の電子シンクロトロンと物性研のSOR-Ring, 第2世代の電総研のTERAS, 高エ研のPFと分子研のUVSOR-Ring, その他、多くの企業が開発したマイクロリングなどが活躍しています。1988年に筑波で開かれた放射光国際会議で、ある外国の方が、「日本は半導体群島と思っていたが、放射光群島となっていたのには気が付かなかった」と嘆じていられました。さらに数年後には、第3世代のSPring-8が世界最大規模の施設として活動を始めます。又、PFも高輝度化して第3世代に変身する予定です。本学会の重要性もますます増大するものと思われま

す。本学会の活動で重要なものの一つとして、会誌の発行があります。異なる分野の研究者達を一つに纏める糊のような存在です。各号に3つ位の解説があり、割合狭い範囲の研究ですが、その分野の研究の動向を優しく解説しているので、楽しい読み物となっています。また研究会報告では、各々の分野での広い範囲での研究活動が伺えます。これまで年4回の発行でしたが、今年からは年5回となります。ますますの充実を心掛けます。

今年の1月10日～13日には、放射光学会年会と共に4実験施設・3利用者団体との共催「放射光科学合同シンポジウム」が実施されましたが、これは試験的なもので、2・3回やってみて見直すことになっています。従って学会員のこれに対する御意見を、是非とも素直にお聞かせ願います。

行事委員会からは、幾つかの講習会・シンポジウムの案が出されていますが、会員の方に良いアイデアがありましたら、是非とも御連絡して下さい。また、放射光紹介の映画・ビデオ（日本語・英語で10～20分。見学者とか理科教育用）を作る提案がありました。これから議論する段階ですが、その必要性についての御意見をお聞かせ下さい。

井口前会長からの引き継ぎ事項で、若手奨励（学術賞）の具体化というのがありました。一応賞金無しとのことで議論されてきていますが、その具体化にはより綿密な検討が必要です。いづれ幹事の方達と相談をして案をつくります。その折りには御意見をお聞かせ下さい。

放射光科学の国際的交流についてですが、1994年5月にアジア交流放射光フォーラムが日本で開催されました。ロシア、中国、台湾、韓国とインドは光源を持っていますが、オーストラリアもPFに独自のビームラインを持って活動中です。これらに加えてタイでも放射光施設をつくる計画が進んでいます。第3世代大型高輝度放射光の3施設であるESRF、APSとSPring-8では、すでに3者協定が結ばれて協力しています。また1993年末に開催された巨大施設の建設・利用にあたって重要な課題となる資金の調達、人材の確保、効果的な運営方法の確立等に関する国際協力推進のためのOECDメガサイエンスフォーラムにおいて、SPring-8の長直線部については国際的な枠組みを踏まえた実現を考慮する必要がある、との意見も出されています。このような現状を見ると、これからは日本放射光学会も国際協力に対応する必要があるでしょう。

放射光科学の発展で最も重要なことは、若い研究者が次々と育つことではないかと考えます。そのためには次世代の研究学生に研究の場を与え、適切な指導のもとに育てることだと思います。何とぞ会員諸氏の協力を心からお願いいたします。

